

日本赤十字社診療放射線技師会創立 70 周年に寄せて



医療事業推進本部長 渡部 洋一

この度は、日本赤十字社診療放射線技師会創立 70 周年、誠におめでとうございます。

最初に設立された赤十字病院である日本赤十字社医療センター（1886 年、博愛社病院設立）が今年で創立 138 年ですので、赤十字病院設立から約半分の年数を占める歴史を有していることとなります。

ところで私は、本職に就くまでは福島赤十字病院で脳神経外科診療を行っていました。ご存知の通り脳疾患患者（脳卒中、頭部外傷等）は昼夜を問わず救急車で来院します。通常の診察時間外に緊急の画像診断や脳血管内治療等を行うことが多く、これまでの医師人生の中で常に診療放射線技師さんには大変お世話になってきました。多大なるご協力に心から感謝を申し上げます。

昨今、画像診断領域は目覚ましい発展を遂げ、X 線単純写真だけだった時代から X 線断層写真が開発され、さらに CT そして MRI の出現によって詳細な画像情報が得られるようになり、また RI やポジトロンを利用した emission CT により脳機能の解析も可能となりました。画像診断の進歩は疾患の診断と病態の把握、治療に大きく寄与しています。

私が脳神経外科医として仕事を始めたのは 1980 年代初頭ですが、その頃は CT を撮影するのに 5 分以上の時間を要し、小児や外傷患者で安静が保てない患者の頭部を手で固定する役目は 1 年目の医者役割でした。脳血管撮影は、頸動脈を 16G ベニユーラで穿刺して造影剤をガラスシリンジで注入し、「よーい、はい！」と掛け声に従って技師さんがスイッチを押す「一発撮り」というもので、医師が手持ちのカセットを入れ替えて動脈相と静脈相を撮影していました。昭和の笑い話です……。その後、連続撮影が可能となり、そして DSA の時代となりました。今では、3D-DSA、road-map は常設の機能となり、コーンビーム CT も撮れるなど隔世の感があります。CT、MRI そして血管撮影においてワークステーションを用いた 3D-image 作成はルーチンの作業となっています。技術の進歩に伴い診療放射線技師の皆様の業務において、日々新しい知識とスキルを修得することが求められています。遣り甲斐のある分野であると思いません。

2011年3月に発生した東日本大震災後の福島第一原子力発電所事故後の福島県における日赤救護班の活動については、原子力災害に対する準備を行っておらず活動の安全性を担保できなかつたことから、福島赤十字病院以外の救護班の一時撤退を余儀なくされ十分な救護活動ができませんでした。その反省から、日赤は「原子力災害時における救護活動ガイドライン」、「原子力災害における救護活動マニュアル」を整備し、その活動指針として原子力災害が発生した場合の日赤の救護活動は、政府等が一般の立ち入りを制限する警戒区域以外の地域で実施し、救護活動中の累積被ばく線量は、1ミリシーベルトを超えない範囲とすることを決めたのです。さらに、原子力災害の発生又はその恐れのある地域への出動時には放射線技師を帯同することとし、救護班要員は、放射線防護に必要なデジタル式個人線量計や防護服セット、安定ヨウ素剤等を携行し、安全性をモニタリングしながら活動することとしました。以降現在まで、緊急被ばく医療アドバイザー会議と放射線災害に関する研修会が定期的に行われておりますが、診療放射線技師の代表の方々にもアドバイザーにご就任いただいて研修の講師等を務めていただき大変お世話になっております。改めて御礼を申し上げます。日赤救護班主事やDMATのロジとして災害救護にかかわる放射線技師さんも増えておりますが、災害医療は日赤の重要な事業の一つですので是非ご協力をお願いいたします。

このところ病院経営は大変厳しくなっております。収入は限られている中で、働き方改革に伴う人員増や賃上げ政策による給与費の増加、診療材料費の値上がり等による支出の増加等によって収支はなかなか改善しない状況が続いています。日々、効率的な業務の追求、すなわち限られた時間内で如何に良質な画像診断件数を増やすか、診療材料の効率的使用により如何に経費を削減するかを心がけていただきたいと思います。

2024年度から医師および医療従事者の働き方改革が始まります。それに伴って種々の職種においてタスクシフト・タスクシェアが行われ、診療放射線技師の業務拡大も各医療機関で検討されることとなります。造影CT検査における静脈路確保、造影剤の注入、IVRにおけるアンギオキットの展開やガイドワイヤー等の機材準備、医師の指示の下で清潔操作による補助業務等を行うことが可能となります。各医療機関の体制と状況により施設としての基準や手順を整備し、研修による知識取得と技能の担保、医師との信頼関係の構築、他職種の理解と協力が不可欠であり、施設ごとの判断が行われます。是非前向きにご検討くださいますようお願いをいたします。

最期に、われわれ赤十字職員の使命は「人間のいのちと健康、尊厳を守る」ことです。このmission statementをいつも心の中に抱き、赤十字職員であることのloyalty（誇り、使命感、帰属意識）を持っていただくようお願いし、ご挨拶といたします。